

中国雲南省ディエンチ湖畔の貝塚の年代

吉 良 竜 夫
滋賀県琵琶湖研究所
520 大津市打出浜1-10

[試 料] コブタニシ (*Margarita melanooides* Nevill) の成殻。風化して白色となり、脆くなっているが、わずかに殻皮が残存する。

[産 地] 中国雲南省昆明市外、ディエンチ湖畔、海口。

[採集年月日] 1991年 6月13日。

[採集者] 吉良竜夫。

[決定年代] 4, 160 ± 200 yr B. P.

1. ディエンチについて

ディエンチ(滇池)は、雲南省の省都、昆明の市街の南に接して存在する、雲南省最大の湖(淡水)である。南北に長い紡錘形をなし、湖面面積 246 km²、平均水深10.5 m、最大水深21 m、平均水位での湖面の高度は海拔1974 mである。起源の古い構造湖であるが、過去の地質時代には一時消滅したこともあり、また先史時代から近世にかけては現在よりも湖面が広がったようである。

この湖は、1960年台までは水のきれいな貧栄養湖であったが、昆明市の膨張(現在の人口約 200万人)と工業化、集水域の開発によって急激に富栄養化し、1980年台末からは、湖面がほとんど通年アオコ(藍藻類の異常発生)でおおわれて濃い緑色を呈し、過栄養状態となった。水草(沈水植物)・魚類・底生動物は大半が死滅し、1990年の夏には、湖底の酸素欠乏のためコブタニシをふくむ無数の巻き貝が死んで湖面に浮かんだ。湖内でさかに行われていた網生け簀による養魚も、ほとんど不可能になった。この経過については、べつの機会に報告した(吉良, 1992)。

昆明市は、1992年から、このひどい水質の湖水を水道水源として使わざるをえなくなっており、事態は深刻である。その現況と水質回復対策については、1988年から大規模な総合研究が行われ、報告書が出ている(昆明市環境科学研究所, 1992)。

2. コブタニシについて

コブタニシ属 (*Margarita*) は、雲南省のいくつかの湖沼にのみ分布する特産属で、5 ~ 6 種が記載されているようである(王, 1988) が、文献が手に入らないので詳細はわからない。コブタニシ類は、他のタニシ類とちがって、海産の貝のような厚い殻をもち、その外面にゴツゴツした突起をそなえることがあり、一見淡水産の巻き貝とは思えないくらいである。コブタニシ (*M. melanooides* Nevill) は、そのうちもっとも普通な種類で、よく成長した個体は、殻の長さ 8~9 cm、最大直径 5~6 cmに達する(波部, 1987)。この種は、上記のように、ディエンチではほとんど絶滅したものと思われるが、かつてはきわめ

て豊富であった。昆明の西400 kmの大理白族自治州にある雲南省第2の広さをもつ湖エルハイ（洱海）では、現在も大量に漁獲され（年産数百トン）、重要な食品となっている。エルハイでは漁獲に対する制限はまったくないが、資源の減少傾向はみられないというから、きわめて生産力の高い生物のようである。

3. 試料の産出状況と貝塚について

採集地点は、ディエンチの南西岸から流出する海口河（下流では螳螂川と呼ばれ、北流して金沙江（長江）にそそぐ）の流出口である。そこには海口の村があり、村の東のはずれ、ちょうど湖と川との境界のあたりに橋がかかっている。この橋を右岸から左岸へ渡ったところの岸の砂地に、深さ 2 mほどの長方形の壕が掘ってあり、掘りあげた土が壕のわきに積まれていた。近づいてみると、それはほとんど貝殻ばかりから成っており、しかも2種のコブタニシ類だけで、ほかの種類はカワニナが若干混じっているにすぎなかった。うち1種はコブタニシそのもので、現在湖内にすんでいるものと形態的な差はなかったが、他方の種は、殻にコブタニシのような顕著な突起がなく、全形が細長く、一見して別種と思われた。量的には、コブタニシのほうが多かった。

ディエンチ西岸の堆積層のなかにコブタニシばかりの層がはさまっていることは、友田淑郎博士（前国立科学博物館）から聞いて、かねてふしぎに思っていた。この壕の壁面には貝殻はもう残っていなかったが、これは、まちがいなく友田さんが見たのと同類のコブタニシ堆積層だと思われた。

他種の貝類がほとんど混じっていない上に、コブタニシ類は中程度以上の大きさの成貝ばかりで、未成熟の個体がみられないことも、この貝殻層のいちじるしい特徴であった。これは、人間または動物による選別がはたらいたことを示唆するもので、貝塚の堆積物の大きな特徴の1つである。だから、十中八九までこれは貝塚であろうと判断された。ただし、それに気づいたのは現場を立ち去ってから数時間後のことだったので、その場でそれほど綿密には観察しなかったが、土器・石器などは伴っていなかった。同行の中国の人々の話では、同様な貝殻の堆積層は、昆明市内でも見られるとのことであった。

この地には、古く滇と呼ばれる国があった。福岡の志賀島から発見された漢の光武帝（在位25～57 AD）下賜の「倭の奴国の王」の金印は、雲南省出土の「滇王」の金印（漢の武帝 140～87 BC 下賜）とよく似ているといわれるが、後者が発見されたのは、ディエンチの南東岸にある石寨山である。京都大学東南アジア研究センターの高谷好一教授によると、この石寨山遺跡にも貝塚が共存するという。しかし、私の知るかぎり現地では、まだこれらの貝殻の堆積を貝塚と認識し、組織的に発掘調査するには至っていないようである。今回の年代測定で、少なくともその1つが西暦紀元前 2,000年ころ、滇王よりもずっと以前のものであることが判明したのは、有意義なことと思われる。

また、日本の淡水貝塚としては琵琶湖のものが最もよく知られているが、その主体はセタジミである（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会，1992）。一般に、海産貝塚を含めて、貝塚は二枚貝を主体とすることが多く、とくに淡水貝塚でタニシのような巻き貝から成るものはめずらしいように思う。この点でも、雲南の貝塚は注目に値する。

琵琶湖研究所の1992年の調査では、エルハイにも、湖岸の砂丘のなかにコブタニシの貝塚が存在することを確認した。そこでは、かなり特徴のある土器片を伴っていた。さきへのべたように、エルハイでは現在もコブタニシの漁獲がさかんで、とくに煮貝を生産しているらしい漁村のまわりには、おびただしい量の貝殻の山がみられた。したがって貝塚は、数千年前から今日まで引きつづき形成されてきた可能性があり、調査すれば各時代の貝塚が見つかるかもしれない。同じことはディエンチについてもいえるだろう。開発によって貝塚が消滅してしまう前に系統的に調査すれば、文化の連続的な変遷を明らかにできるかもしれない。これは、考古学の門外漢からの意見である。

参考文献

- 波部忠重(1987)：中国雲南省洱海産のコブタニシ．ちりばたん(日本会類学会研究連絡誌, 18(1), 12-13.
- 吉良竜夫(1992)：湖が死ぬとき．滋賀県琵琶湖研究所所報, 9, i-iv(巻頭言)．『世界の湖』(滋賀県琵琶湖研究所編, 人文書院, 京都)(1993)にも再録。
- 昆明市環境科学研究所(編)：滇池富栄養化調査研究．雲南科技出版社, 昆明．207pp.
- 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会(編)：粟津湖底遺跡——大津市晴嵐町地先(南湖粟津航路(2)浚渫工事に伴う発掘調査概要報告書)．大津．119pp.+38 図版．
- 王麗珍(Wan Lizhen)(1988)：雲南高原湖泊貝類種群的生態学研究．雲南大学々報(自然科学版), 10, 増刊, 37-43.